

健康文化

西安紀行

真下 伸一

平成九年の夏休みに西安へ行って来ました。8月も終わって9月に入っても、夏休みをどうしようかと思いつながら何もまだ決めていない状態でした。妻と相談して4、5日の短い時間でいけるところで疲れない近いところがよいと思っていました。妻が妻の友達で旅行会社に勤めており、彼女自身しょっちゅう海外に行っている人に相談してくれて西安はどうかということになりました。以前から歴史には興味があったので、西安（長安）か、うん悪くはないなと思いました。それまでの私の海外紀行はニューカレドニア、ハワイのみで比較的気楽に行けて、リラックスできるそして日本とほぼ同じく整った社会情勢のところのみでした。急いで予約を取り、親類、妻とその友達とでかけました。妻は以前に北京へ行っていますので中国の雰囲気はわかっておりました。中国はそれらの国とは全く異なって、なんでもありというか気をつけていないと何をされるかわからないようなところがあるがそれがおもしろいといっておりました。

西安行きの飛行機は小牧空港から出ているので大変に便利です。上海まで1.5時間、そこで1時間の乗り継ぎの時間がありそこからまた1.5時間で西安空港に着きます。

どの国の飛行機もあるのかもしれませんが中国西北航空の機内に入るやすぐに中国のはっきりとした臭いが漂ってきました。あとで現地へ着いて食事を何回かしてみてこれは八角の臭いだとわかりました。出される機内食にも八角の臭いが強く、日本で食べている中華料理とは全く異なる物でした。

東シナ海の向こうに茶色の大地が見えてきました。緑はあまりありません。巨大な海のような長江を南へ渡って上海に降ります。そして見えてきた建物は整然としていますが画一的であり整いすぎているという感じがしました。毛沢東の作り上げた社会主義体制というものをまざまざと感じさせました。

飛行機は西安の街の上空を旋回して降りてゆき、街の中央と思われる所から十文字に明かりが見えました。簡単に来ることが出来るので来た旅行でしたが、

このときにはついにあの長安に来たんだとわくわくとした気持ちがこみ上げてきました。

空港には現地のツアーガイドがマイクロバスで迎えに来てくれていました。バスは空港を出てすぐに高速道路に入りますが、途中で見える建物、ガソリンスタンドも巨大で、日本で見るような洗練されたものではなく無骨で威圧的な印象を与えました。暗闇の中を1時間ほど走りますが村に入ると高速道路の手すりに人が何人も腰掛けてこちらを見えています。何もせずただ腰掛けているのです。日本とは全く違った時間が流れているようでした。

ガイドの人は王さんという27、8才ぐらいの男の方ですが日本語が充分にできるので大変に助かりました。丸顔で気さくでそして大変に熱心な人でした。後になって聞いたことですがお父さんは大学教授で本人は西安大學で日本語を専攻していたとのことでかなりのエリートに属する人のようでした。バスの中でもいろいろな説明を熱心にずーっとしてくれ、西安の歴史、文化に誇りを持っているのがよくわかります。彼は今回の旅行中土産屋には寄ろうとしませんでした。私たちが頼んで一度だけいったほどです。これは大変にめずらしいことであり、私たちは本当に幸運でした。偽物を売ろうとする店員とけんか腰になって私たちが買おうとするのを防いでくれることもありました。

西安の街に入るのには城壁を通ります。思わず声が出てしまうような迫力があります。立派で大きく歴史の重さを感じさせるもので、高さは20m、幅は30-40mはあるでしょうか。明代のものでこれが街全体を取り囲んでいます。これを見ただけでも来て良かったと思いました。夜9時頃についたのですが、街の中は自転車と歩行者があふれており、まだ暑い時期であり皆夕涼みに出てきているようでした。道路は車道にも自転車が走り、歩行者も平気でどんどん渡っていきます。古い建物はこわされ新しい結構立派な住宅やビルが至る所で建てられていました。一部の大金持ちが買うのでしょうか、大変な速さで発展しているようでした。日本よりすでに貧富の差が大きいのではと思ってしまいました。

次の日ホテルで目が覚めて窓から見下ろしますと隣のビルの屋上にベッドで寝ている人がいました。ホテルの中と外は全く違う世界でした。日中に見た街は埃っぽく乾燥していました。西安を出た西域ではだんだんと砂漠化が進んでいると聞きました。このあたりを流れる黄河の支流である渭水も少ない水量でした。街をでて東にマイクロバスで一時間で始皇帝兵馬俑博物館につきました。途中、パトカーと黒塗りの車が民衆を蹴散らして猛スピードで駆け抜けて行く

のを何度も見ました。それは日本ではお目にかかったことのない風景でした。兵馬俑坑は始皇帝陵の陪葬坑の一つですがほかの陪葬坑も多数見ついています。これらの陵墓群は70万人の奴隷を使って37年間で作られたといえます。始皇帝稜本体は今では付近にある広大なザクロ畑の中に埋もれていました。司馬遷の史記によれば始皇帝が地下宮殿に水銀の川を作らせたとのことで、実際にザクロ畑の土を調べてみると水銀の含量は普通の数倍あるということがわかっています。しかし発掘はまだ全く手つかずです。兵馬俑博物館は1-3号坑まであります。1号坑が最も大きく歩兵と戦車の軍団です。写真などで見たことはありましたが実物の迫力はすばらしいものです。兵士の上に向けられた巨木は史記に書かれているとおり項羽（最近陳勝呉広の乱のときの暴徒によってもすでに一部焼かれたのがわかった）によって焼かれたのがはっきりわかります。巨木は下側が黒くなっており2000年の時を経て半分石になりかかっています。兵士の顔は皆20-30歳代で若いことがはっきりとわかります。また表情は一人一人異なり、実際に存在した秦の都咸陽の守備隊の一人一人を模したものであると考えられています。当時の皇帝の権力のすごさ、人民の苦勞はどれほどすさまじいものであったのでしょうか。力で中国統一をなしとげ、さらに古代の王たちの夢であった泰山での封禪の儀式もなしえた始皇帝ではありませんが永遠の命をもたらす妙薬を探させたのは有名な話です。そして巡行中に腫瘍と思われる病であっけなく約50才で亡くなります。

当時と比べて医学は格段に進歩しました。生活も楽になりました。当時の世の中の常識、考え方は今とは大きく異なっていたことでしょう。それがどんなものであったか大変に興味があります。しかし基本的な人間の欲望は変わっていないのではないのでしょうか。

陵墓からの帰り道、田舎のレンガ作りの家を見してみると兵馬俑坑でつかわれていた日干しレンガそのものでした。彼らの暮らしは2000年前と大してかわっていないのではないかと。一方では町中の急速な発展。そしていまでもある権力者の強圧的な振る舞い。一部ではあるが全体では大変な数になる非常に優秀な人たち。日本とは全く異なる様子を見てさまざまな思いが去来いたしました。しかし大変に印象的で引きつけられる旅でした。

(中部労災病院・放射線科部長)